2020.3.3

博物館 Dictionary No.220

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館1F-5（金工）に展示されている作品について勉強してみよう。

美しき七宝

様々な技法や素材を用いる金属工芸の中で、古くて新しい存在が七宝です。七宝とは、金属で作られた器の表面に、陶磁器の仕上げに用いられる釉薬と同様のものを塗り、高温で焼成してガラス質の被膜を作る技法とその技法によって作られた作品のことです。基礎となる素材に金属を用いる分、陶磁器より頑丈で薄く、繊細な造形を作りやすい点が七宝の特徴と言えるでしょう。「七宝」の名前は、釉薬の成分を変えることで様々な発色を示すさまを『無量寿経』や『法華経』に語られる仏の国を飾る七つの宝（金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲、珊瑚、瑪瑙ないし金、銀、瑪瑙、瑠璃、硨磲、真珠、玫瑰）に見立ててつけられたとされています。その名のとおり、七宝は多種多様な色の組み合わせで彩られる色彩豊かな工芸品なのです。

古代の七宝

日本における七宝そのものの発生は比較的早く、現存する作例としては飛鳥時代の牽牛子塚古墳より出土した「七宝亀甲形座金具」や、奈良時代の正倉院宝物「黄金瑠璃鈿背十二稜鏡」を挙げることができます。また、厳密な意味での七宝ではありませんが、藤ノ木古墳から出土した「金銅装鞍金具・後輪」の取手には、熱せられてまだ柔らかい状態のガラスを粘土のようにこねて押付けた装飾が施されています。釉薬と近しい成分であるガラス製品も古代から生産されているため、当時の人々にとっても比較的なじみ深いものだったのかもしれませんね。しかしながら、それ以降、直接的な継続関係にある作品はほとんど生まれず、日本における七宝の製作はここで一旦途絶えてしまったと考えられています。

図1　七宝唐花文手付盆　江戸時代　京都国立博物館蔵

近世の七宝

日本製の七宝が再度出現するのは室町時代末から桃山時代初頭にかけてです。それまでの間、日本国内での製作こそ行われてはいませんが、七宝そのものが日本社会で忘れ去られていたわけではありません。特に室町時代においては中国文化や中国からの舶載品を珍重した足利将軍家の意向もあって、中国製の水墨画や陶磁器と共に七宝の存在も伝えられていたと思われます。桃山時代を過ぎると、中国大陸や朝鮮半島から再度もたらされた七宝技法をもとに、日本国内での七宝製作が盛んになり、その流れは明治に至るまで続きました。

図１の「七宝唐花文手付盆」は、アーチ状の取手と花先形の脚をもうけた銅製の盆に有線七宝を施した作品で、この種の七宝作品の中では最も早い時期に製作されたとみなされています。有線七宝とは、単純に釉薬を器胎の表面に塗るだけではなく、細い金属線で境界を作り、成分の異なる釉薬が混ざらないように配慮して、色の住み分けを行ったものです。七宝は陶磁器との影響関係が多く、この有線七宝の技法も中国の粉彩磁器の一つ掐絲琺瑯を意識して開発されたものと思われます。地に有線七宝による繊細な唐草を巡らせ（図２）、その合間に円形の空間を設けて図様を表す構成は、粉彩磁器の中でも多数の色を使用し、塗り埋め方式で装飾する十錦手との関係を指摘されることも多く、これこそ金工の職人と陶磁器の職人がお互いに分野を超えた刺激を与えあっていた証拠ではないでしょうか。

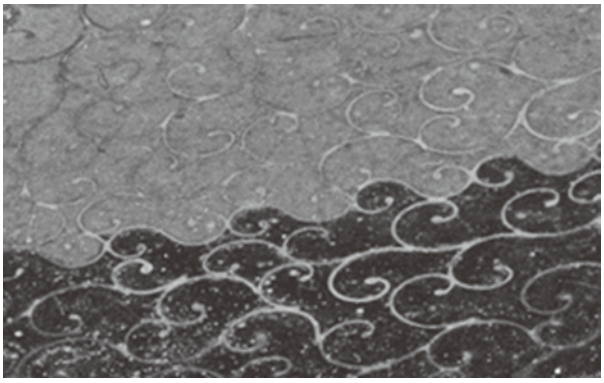

図２　七宝唐花文手付盆　江戸時代　京都国立博物館蔵　部分

見込みを斜めに二分割する片身替の構成は、本来、室町時代から桃山時代に隆盛を見せたものですが、その斬新なデザインセンスは何度もリバイバルされ、江戸時代の小袖にも用いられるなど、復古的な意味合を持つ図様です。それに加え、変形の菊桐紋を各所に散らすなど、その意匠と図様構成に明らかな日本的感性が見られますが、最も大きく描かれた如意頭形八弁唐花文や捻十弁唐花文に中国的な要素の混入を認めることができます（図３）。江戸時代の七宝には、中世以前からの日本的意匠や図様に七宝で補彩的な彩色を施したものと、器形や文様構成そのものを中国的なものの模倣とする二系統が存在しますが、この盆は日本的な感性のもと、中国由来の意匠を巧みに取り込んだ両者の折衷作品と言えるものなのです。金工的な要素と陶磁器的な要素、日本的な要素と中国的な要素、中世的な要素と近世的な要素、様々な影響をまとめ上げたところが見る人を惹きつける七宝の魅力なのです。

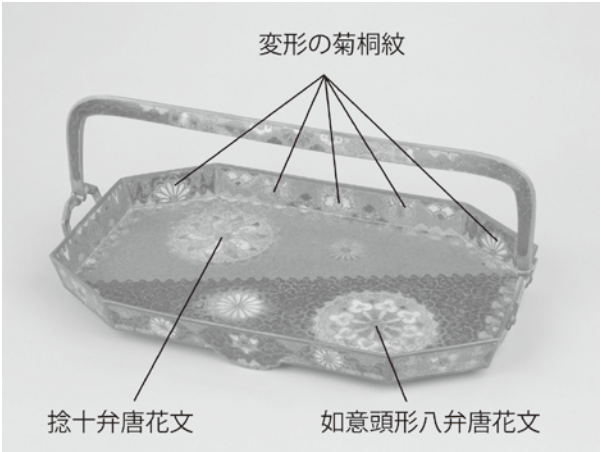

図３　文様の名称

（工芸室　末兼俊彦）

印刷・富士印刷社